はじめに

２０２０年夏、『西日本新聞』に「忘れ得ぬ九州人」を連載した。九州と沖縄にゆかりのある50人を選んで人物スケッチしたのである。その7月7日付けで私は西山太吉を次のように書いた。

２００２年民間放送連盟賞テレビ報道番組部門の九州沖縄地区の審査を担当して、琉球朝日放送の「告発――外務省機密漏洩事件から30年　今語られる真実」に粛然となった。私を含む4人の審査員がすべて最高点をつけて全国審査に送られたが、衝迫力は元『毎日新聞』記者、西山太吉の静かな、しかし、シャープな怒りに満ちた言葉から生まれる。

沖縄の普天間基地の代替地とされる辺野古を訪れて、

「きれいなところですねぇ」
と呟く西山の表情に、かつての険しさはない。けれども、風雪を経た圧倒的な存在感がある。
１９７１年に西山は、沖縄返還に際してアメリカが日本に支払うべき４００万ドルの補償金を日本が肩代わりする密約をスクープした。しかし、その取材方法が違法だとして国家公務員法違反に問われ、逮捕されて有罪判決を受ける。当時の首相、佐藤栄作をはじめとする自民党政府の巧妙なスリカエによって、彼らの国家犯罪が隠蔽されたのである。
「返還協定の中にきちっと米軍用地の復元補償について米側が支払うというように条文で明記されている。それを放棄したにもかかわらず、米側が自発的に支払ったという形で、放棄してないことになっているわけですから、これはもう条約の偽造でしょう」
こう語る西山の生涯は、彼をモデルとした山崎豊子の小説『運命の人』（文春文庫）全4巻に詳述されている。もちろん、フィクションの部分もあるが、テレビドラマ化されてモッくんこと本木雅弘が演じた弓成亮太のモデルは西山であり、国家の嘘

を追及した西山の人生と重なる。もう1冊、西山の問題提起を活写した作品として澤地久枝の『密約』（岩波現代文庫）を挙げなければならない。

私は西山から彼が『琉球新報』に書いた「日米軍事再編」上中下の切りぬきを送ってもらったことがある。

国家のウソを暴いた記者は残念ながら西山だけである。そのために西山は権力の報復を受けた。しかし、西山の挑戦はきちんと評価されていない。メディア、もしくはジャーナリズムの衰退が叫ばれている現在、あらためてそれを顕彰したいと私は思った。権力とは何か、そして、それに挑むジャーナリズムとは何かを西山の軌跡が教えると思うからである。

次に、公明党と連立を組む自民党の現在の総裁、岸田文雄は宏池会という派閥のトップだが、西山はこの宏池会と深いつながりがある。宏池会は池田勇人を首相にするためにつくられた派閥であり、前尾繁三郎、大平正芳、宮澤喜一らがそのトップの座に座ってきた。

池田はリベラルの源流、石橋湛山の精神を受け継ぎ、宏池会は代々、民権派として知ら

れる。

それに対抗して、岸信介の系譜を受け継ぐ国権派の派閥が清和会（現・清和政策研究会）であり、福田赳夫、安倍晋太郎、小泉純一郎らがそれに属する。２０２２年夏、凶弾に斃れた安倍晋三もそうである。

ハト派の宏池会、タカ派の清和会と色分けすることもできる。主な違いは宏池会が護憲で、清和会に改憲論者が多いということだったが、岸田は今、改憲を唱えている。

田中角栄とともに中国との国交回復に力を尽くした大平と西山は相許した仲だった。日米関係と同じように日中関係を大事にするのが宏池会であり、中国を袖にしてアメリカを第一にと考えるのが清和会だということもできる。

その宏池会の政治家を誰よりもよく知る西山に、宏池会の精神、思想とは何かをあらためて尋ねたいと思った。それはそのまま、政治家とは何か、あるいは政治とは何かを浮かび上がらせるだろう。

そして三つ目は沖縄である。〝憲法番外地〟ともいうべき沖縄は、現代日本の矛盾を集中して抱えている。それは西山が暴いた沖縄返還の密約に象徴されるのだが、その矛盾を西山の口から語ってもらいたいと思った。

90歳を過ぎたが、西山は元気で、声にも張りがある。できるだけ、その口調を生かす形で「証言」を届けたい。

佐高 信